柳田民俗学と東大新人会

——大間知篤三を中心に——

鶴見太郎

【要約】一九二〇年代後半の学生社会運動を主導した東京帝大新人会の活動家の一部が運動離脱後、柳田国男の民俗学に傾倒した現象は、かつて民衆への洞察を欠いたことに対する彼等の自省から生じたとの位置づけがなされている。だが活動家時代、彼等の多くが福本主義を旺盛に摂取し、三〇年代以降は翼賛運動下でアジア主義に傾斜していく行程は、「山村生活調査」に見られる着実な民俗採集の積み重ねを基調とし、安直な他民族の習俗との比較や論断を許さない柳田の方法論との間に元々齟齬をきたす可能性を秘めていた。自らも新人会出身者であると同時に敗戦前、柳田の薫陶を最も受けた民俗学者の一人である大間知篤三が旧「解党派」の水野成夫、浅野晃等と国民思想研究所に於ける家族制度調査、『アジア問題講座』の編集を通して「民間伝承の会」とは別個の思想環境を維持し、戦後柳田から離れていく軌跡はそのことを示唆している。戦時下に行われた轗軻のマルクス主義者と柳田の交流は、柳田民俗学の包容力に寄せて取り上げられる以外に、「師とその弟子」という関係に於ける葛藤を内包していたのである。

史林　七七巻四号　一九九四年七月

はじめに

一九三〇年代以降、柳田国男は自らの民俗研究方法を開示し、その研究組織を全国規模で拡大していく。今日依然として日本民俗学と同義に解釈される事の多い柳田民俗学の基盤は、ほぼこの時期に形成されたと言ってよい。その研究体制を確立する途上にあった柳田の周囲に数名のマルクス主義者の姿があった。この現象は「三・一五」、「四・一六」事件を

経て加速化する思想弾圧の中で、政治運動から離脱した一部のマルクス主義者が自らの民衆観の再考を迫られた時、体制から距離を保っていた柳田の民俗学に接近するという行動に起因していた。戦時下で柳田に師事するこれらマルクス主義者の群像は、日本の民衆を理解する上で柳田民俗学が回帰の対象になる傍証として、これまで再三にわたって取り上げられてきた。[1] 一方、彼等の内で接触を乞う者を拒まなかった柳田の寛容さは、時局と一線を画した思想家という評価を柳田に付与する事ともなった。昭和初期の転向マルクス主義者と柳田の関係を包括的に捉えた後藤総一郎氏の「柳田学と転向」（『ピェロタ』一九七二年一〇月号）は、とりわけ一九二〇年代後半に於ける東京帝大新人会（以下、新人会と略す）活動メンバーの柳田民俗学流入が顕著だったことを部分的に紹介している。[2] この示唆的な提起に従い、戦時下に柳田の影響を受けることで、言わば学ぶ者の立場から柳田民俗学を特徴づけている東大新人会について一瞥しておこう。

新人会研究史上、画期となったのが一九六九年一月一八日に東京学士会館分館で行われた「東大新人会創立五十周年記念会」[3]であることは衆目の一致する所である。この時の集まりを境に、新人会出身者の手による記録編纂、刊行が系統だって行われたが、[4] これら当事者による資料発掘に先んじて出版された Henry D. Smith 氏の *Japan's First Student Radicals* (Harvad University Press, Cambridge, Mass., 1972)〔邦訳、松尾尊兊・森史子訳『新人会の研究　日本学生運動の源流』東大出版会　一九七八年〕は、その周到な聞き取りを含む調査が新人会出身者相互間の交流を密にした点に於いても逸することはできない。同書は新人会による活動が破綻せざるを得なかった理由のひとつに帝大生在来の選良意識もさることながら、新人会活動家が「マルクス・レーニン主義の普遍的な教義に一議に及ばず傾倒するのみで日本文化の特性について論理的な究明を行うことを怠った」ことを析出し、転向した新人会会員の辿った興味深い経路のひとつに柳田の下で民俗学を学んだ例として、中野重治と大間知篤三を挙げている。[5] しかし同書の基調ともなっている「長期的な歴史的意義という観点」から新人会の活動を見る姿勢は、新人会出身者の個々の胸中に抱える過去への自省の枠を外れ、新人会の活動自体はその担い手たちの戦後に於ける後半生に効果があったという肯定をも生みだす。[6] こうした価値判断は措くとして、この観点を

学究の世界に身を投じた新人会出身者に限って言えば、過去の運動体験がその専攻の中で独創的な視野を提供する磁場たり得るのかという設問に置き換えることも可能であろう。以上の経緯を踏まえた上で、一九三〇年代以降、新人会出身者が柳田の門を叩いたことを確認する時、ここに「師とその弟子」という別の問題が派生してくる。翻って折口信夫の例を持ち出す迄もなく柳田が弟子たちの独自の創見について依怙地とも言える態度を時流と無関係にとりつづけたことを受け止める時、一時的にせよ彼等が学生時代に同時代のマルクス主義の影響下にあったという事実は、柳田との対応関係の中に潜在的な軋轢を引き起こす素地を持っていたと言えよう。左翼運動から離脱したとはいえ、新人会時代に身につけた思考様式、往時の人的な繋がりが転向、柳田民俗学への傾斜を以て途絶えたと考える訳にはいかない。それは柳田との師弟関係の中でも並行して維持されたと見るべきであろう。そして柳田の学問に接触した新人会出身者は、その著作の中でどの様な変容を実現したのか。その問いは反対側に柳田は新人会出身者と接触することで何がしかの反応を示したのかという別の問題を含んでいる。

本稿で叙述の軸となる大間知篤三（一九〇〇―七〇）は、先鋭な新人会活動家として学生時代を過ごし、共産党入党、転向出獄という行程を進んだ一九二〇年代中葉に於ける新人会会員の典型である。そして今日の日本民俗学の中で主流となっている村落への社会学的な集約的調査を、家族制度とりわけ婚姻、隠居制を軸に民俗学の側から開拓した人物として銘記されるとともに、三〇年代最も柳田の薫陶を受けた一人でありながら、戦後柳田の下を去った民俗学者である。ここで大間知が如何に柳田門下にあって特別な位置を占めるかについて触れておく。

第一に新人会時代に於ける活動歴の重さである。柳田の指導を受けた研究者の中には他に佐々木彦一郎、守随一の新人会出身者がいたが、双方とも学生時代、目立った政治活動を行った形跡がない。[7] 彼らは事実上運動とは無関係のまま卒業したのであり、柳田の民俗学を学んだ契機に政治的弾圧は介在しない。これに比して新人会の最盛期にあたる一九二六年に新人会幹事長を務めた大間知は、当時の新人会の思潮をより忠実に汲み取った人物と言えよう。これに付随して前記二

名がいずれも敗戦を待たずに病没したことは、自ずから戦中戦後を通じて柳田との関係、その推移を見る上で大間知を屹立させる。

第二に前項より重要なことは、大間知が柳田に直接師事した民俗学者にして戦前共産党員だった点である。転向、非転向を問わず、戦前に入党歴を持ち戦時中柳田民俗学の影響を受けた人物のうち、当初から民俗学を志し、系統的に柳田から長期にわたる直接の指導を受けたのは大間知以外には見当たらない。敗戦まで獄中にあって柳田を読んだ志賀義雄は無論のこと、中野重治、浅野晃は時折個別に柳田を訪れる以外に交流の機会を持たなかった。石田英一郎もまた「民間伝承の会」発足当初からの会員であるが、ウィーン大学民族学科への留学（一九三七～三九年）、ウィルヘルム・シュミットへの傾倒に見る如く、その立脚点は文化人類学の側から柳田民俗学を見据えることにあった。すなわち新人会を経て、弾圧下にあった共産党から柳田民俗学へという軌跡を最も正確に歩んだのが他ならぬ大間知だったのである。その大間知が何故、柳田から離れて行ったかの説明として引かれるのが、一九三九年から敗戦の年まで満州建国大学で民族学の教鞭をとりながら、同地の少数民族の社会組織、祭祀組織を調査した際、柳田の民俗語彙を媒介とする調査方法の不適用を体験したことである。[8] 確かに民俗学の見地から判断する限り、この時の体験が遠因となったことは疑い得ない。しかし柳田入門以前の大間知の足跡を念頭に置く時、そこには時代的な要因が作用する余地もまたあり得たのである。先を急がず、まず大間知の新人会時代を見ていくことから始めたい。

① ここでは次の三点を挙げておく。益田勝実「『炭焼日記』存疑」（『民話』一九五九年一一、一二月号、一九六〇年二月号）、竹村民郎「柳田民俗学の軌跡」（『日本史研究』一九六二年一一月号）、Morse, Ronald. "Personalities and Issue in Yanagita Kunio Studies", *Japan Quarterly* (July-September) 1973. 益田論文は当初、農村の貧困を直視することから出発した柳田民俗学が、その本来の目的から遊離し現実性を失っていく中で、戦時下のマルクス主義民俗学者もまた柳田民俗学の受容のみに終始し、独創性を発揮しえなかったとする。竹村論文は戦時下にあって原始共産制をテーマに民俗調査に打ち込むマルキシストを事例に、時局の中の潜在的な抵抗様式を抽出する。モース論文は時流から隔たると同時に学ぶ側の政治意識をも混入させない、三〇年代に於いて柳田民俗学が持った希有の研究環境を指摘し、個々

のマルクス主義者の柳田接触を紹介している。

② この論考では柳田民俗学が掲げる「牧歌的な故郷の匂い」を転向の際、心情的に受け止めた型、被支配者たる日本民衆解放の為に柳田民俗学を学んだ型、柳田の視点を自らの転向体験を通じて「特殊から普遍」へ独自の学問領域を切り開いた型に「転向マルクス主義者」を類別し、各々の範疇を小林社人、橋浦泰雄、石田英一郎によって代表させ、彼らが柳田の民俗学に向かって行った内的な要因、及びそれによって何が得られたのかに眼目を置き、新人会出身活動家による柳田民俗学への流入は指摘の段階に留められる。

③ この時の会合については石堂清倫『続わが異端の昭和史』（勁草書房　一九九〇年）二五〇―六〇頁を参照。当時大間知篤三は病臥中であり（翌年二月二六日死去）、出席していない。

④ 石堂清倫・竪山利忠編『東京帝大新人会の記録』（経済往来社　一九七六年）は前注の会合に於ける出席者のスピーチ、数名の会員による回顧録、一九二六年から解散に到るまでの新人会の活動を詳細に追った記録からなり、NSクラブ編『東大新人会員の足跡』（創造書房　一九八七年）は確認されている新人会会員の略歴を個別にまとめたもの。八八年に補正表が追補された。また、一九七九年より年刊で『東京帝大新人会研究ノート』（以下、『ノート』と略す）が慶応義塾大学法学部中村勝範研究会から出ている。

⑤ 同書　二一九頁。

⑥ 同書　二〇四、二五一頁。

⑦ 佐々木は理学部地理学科を二五年に、守随は経済学部を二八年に卒業。守随は満鉄調査部事件に連座して四四年に獄中死。

⑧ 上野和男「大間知篤三――その研究と方法」（『日本民俗のエッセンス』ぺりかん社　一九七九年）二二六頁。

第一章　一九二〇年代後半の東大新人会

第一節　学生運動の転換期

自営ではあるが堅実な生活を営む農耕民（中農）を自らの民俗学の座標に据え、「学問のある人だけにしか思想がない、という結果」に対して惧れを抱いていた[1]柳田にとって、明治以降制度化された教育機構である帝国大学の中で育った学生とは、本来迂遠な存在だった。

一九四一年六月、発足して間もない東京帝国大学全学会主催で行われた連続講義[2]「日本の祭」の冒頭で、その柳田は珍しく「学生」を民俗学の俎上で論じている。前年一〇月に発足した大政翼賛会を受けて、東京帝国大学にも「教学刷新」を指標とする全学組織設立の気運が高まり、全学会自体は文相の訓示を待たず学内で自発的に誕生したものだったが、[3]こ

の戦時動員の布石とも言うべき運営事業の中で、作為的に生み出される祝祭行事とはおおよそかけ離れた質樸な祭祀を題材に据えたことは、ここでも時流から逸れた相貌を柳田に与えている。だが居並ぶ聴衆を「祖父母から孫へ、郷党の長者から若い者へ」と伝えられる有形無形の伝承を、十余年の学生生活と引き換えに体得する機会を失ってしまった存在と位置付けたこと[4]に見るように、柳田の憂いはむしろ言葉にならない生活様式を受け継ぐ回路から、彼らが浮き上がっている所に力点がある。戦後になって『定本　柳田国男集』の刊行を控えていた時、柳田が自ら帝国大学学生時代に作った新体詩を収録することを希望しなかった事実[5]は、晩年の柳田が壮年期以後の民俗学者としての活動に鑑みて、それらをどのように自己判断したのかを物語っている。そして柳田はこの講演の中で、学生達のうちにかろうじて維持された幼少期の祭の体験を呼び水にすることで、彼らと民衆との間に残された心意伝承の細道を見いだそうと試みる。

一九二三年、金沢の第四高等学校（以下、四高と略す）を経て東京帝国大学の独文科に入学した大間知篤三もまた、ここに見る「非常時」の学内統制の時代でなかったとはいえ、この時柳田が抱いた学生観から外れるものではなかった。大間知自身は四高時代、庭球部に籍を置くかたわら、同じ文科乙類（ドイツ語）の中野重治らとともに同校生徒会発行の『北辰会雑誌』の編集に携わり、また富山中学の同窓生による同人誌『ふるさと』の刊行にも参画していた[6]。折から新人会は同年九月、震災直後の社会主義者弾圧を背景にその政治活動方針を穏健化させ、具体的な学生生活の改善を指標に広範な会員の獲得に乗り出し、所謂「リベツ化」（大衆化）の時期にあった。他方で会内規約が確立され、団体としての新人会の活動基盤もほぼこの時期に再編されるに到り、機構の上では総会で選出された幹事（任期二ヵ月）によって構成される幹事会が執行機関として運営業務を担当し、事務レベルで設けられた「機能班」を統括した[7]。既に一九二二年秋、それまでの主要大学、高校、専門学校に於ける学生運動団体は「学生聯合会」を発足させ互いに提携していたが、二四年九月の第二回学聯大会で「学生社会科学聯合会」（以下、学聯と略す）と改称し、傘下団体を拡大していく[8]。

一方、『新人會々報』（二四年七月）所収の「学生運動と個人の任務」は、いちはやく「リベツ化」の危険性に触れ、学生

を無産階級から遊離した消費生活者として捉え、学生の率先した自己犠牲、団体意識を強調することで、無産階級運動への貢献を説いた。同論文では学生運動自体を「形式も異なるにしても、常に大なり小なり結果としての無産階級解放運動への貢献を豫想」するものと捉えていたが、その一方でマルクス主義研究は、依然として「運動に於る将来必要なるべき諸研究の一分担者」[9]と位置づけられていた。この様な学生運動の転換期にあって、大間知もまた少なくとも二四年四月の段階では既に会員となっていた。[10]同年に四高から入学した学生の中には中野重治、石堂清倫ほか後の新人会会員九名が含まれており、既に入会した大間知とともに以後、四高出身者は会内でも際立った結束力を発揮することになる。この年、水野成夫は仏法科を卒業し、浅野晃、志賀義雄は各々仏法、社会学科の三年に在籍していた。

入会当初、大間知は先述の『ふるさと』の刊行を続けている。二五年一月、同誌は中野重治をはじめとする新たな同人を加え、『裸像』として再出発を果たすが、その第二号巻末の「同人雑記」に大間知は「此の頃、僕は新しい路に入らうとしている……去年の暮頃から、人道主義的人生觀の代りに社會主義的人生觀が心の中で成長し始めた」、「心の中の配列を、今や新しく立て改めてゐる」[11]と記している。これは大間知に限ったことではなく、号を追う毎に同人の間に文学に飽きたらぬ空気が生じ、雑誌自体は同年五月発行の第四号「編集後記」に次号の編集担当を大間知が行うことを予告したまま、ついに刊行されずに終わる。後年、中野は「街あるき」の中で、太田篤の名で表向きは自らの非才を口実に同人誌から身を引いて新人会の活動に専心していく大間知を描き、「文學を努力をもつてやつていくこと、それが才能なんだ」という主人公・片口安吉の独白と対置させている。[12]

同年七月開催の学聯大会で採択された綱領は、「リベツ化」の時代を「學生なる社會群の認識の不足、社會科學研究の缺除によりプチ・ブルジョワ的運動に堕せんとした時代」と批判した上で、当面の任務の一つに「プロレタリア的社會觀」を養うための明確な理論の獲得を掲げ、学生運動と無産階級運動は新たに「共通の利害の上に立ち、共通の階級敵に對立」するものと規定された。[13]新人会の陣容も菊川忠雄、岡田宗司らリベツ化を担った社会民主主義系の指導者に代わって、是

枝恭二、村尾薩男など程なく共産党に入党する活動家が台頭してくる。大間知自身はその頃、学友会の社会科学研究部で後藤寿夫（林房雄）が主導する社会文芸研究会に属しており、[14] マルクス主義とそれまでの創作活動の間に折り合いをつけていたが、新人会内部で将来、運動家になる見込みを持つ会員に対して系統的な説得が行われた結果、[15] 二五年末には運動に専念することになる。

第二節　福本主義下の群像

一九二六年春、大間知は卒業を一年延期して新人会幹事長に選ばれている。本来、幹事長は幹事会での互選による決定を原則としていたが、当時既に新人会内部では将来活動家として有望視される者に幹事長を経験させる傾向が強まっていた。[16] 加えて既卒、中退の新人会出身者のうち数名はこの頃、再建途上にあった共産党（コミュニスト・グループ）に関係しており、彼らの内で中野尚夫が京都学聯事件で検挙された後藤寿夫に代わって大間知を指導するようになった。[17] 同年の五月一三日には岡田文相の内訓「生徒の左傾思想取締に関する件」が発令されていたが、新人会の活動自体は曾てない活況を呈し、会員数は在学中の脱会者を含めて三七名（二七年卒）、三八名（二八年卒）、五六名（二九年卒）と増大したほか、事実上新人会の外郭団体となっていた社会科学研究部（社研）が二六年には三百名以上を擁していた。これに並行して同年四月に始められた四高出身者による北辰会読書会を嚆矢とする出身高別読書会が軌道に乗り、[18] 広く社会科学に関心を持つ学生を引きつけていた。大間知が門屋博によってコミュニスト・グループ加入の勧誘を受けたのは、二六年九月下旬から一〇月下旬とされるが、これに先立って六月頃には新人会合宿所で『無産者新聞』の労農党の活動方針に関する社説を、合法面のみの活動では得られない情報によって鮮やかに論評し、同宿の仲間内では大間知の入党が囁かれ始めていた。[19] 七月には共産党再建ビューローが正式に福本和夫を組織・理論面での責任者として入党させ、秋口からは卒業を控えた学生活動家を少人数に分け、水野成夫、浅野晃ら既卒の新人会の先達を講師に福本の論文の講読会が行われるようになる。[20]

その中で折から鈴木茂三郎らによる中間左翼結成運動に対抗して、「インテリゲンチャ」の左翼結成を主眼に一九二六年七月下旬から同年末まで数回にわたって私的に開かれた「学生インテリゲンチャ小委員会」は、福本の側もこれを積極的に主催した点で、さらに再建前夜の共産党の政策方針に対する新人会出身の活動家の関与を示す点で重要である。メンバーは福本和夫、水野成夫、門屋博、中野尚夫のほか、やや遅れて加わった中で確実視されているのが浅野晃、石田英一郎[21]である。ここに集まった面々は学生運動出身の活動家として、二六年から二七年の短い間に雁行して入党し、熱心な福本主義者であった点で共通している。大間知はこの会合に参加した形跡はないが、翌二七年二月一日より同委員会の実質上の機関誌として創刊された『政治批判』[22](二九年二月まで継続)の発行人を第五号(二七年六月一三日発行)まで務めている。発行所の政治批判社の置かれた赤羽稲付には当時、水野と浅野が借家しており、新人会の後輩連中を連れて来て寝泊まりさせていたことから、[23]大間知と両者の交流は既にこの頃から始まっていた。そして創刊号から第三号にかけて、同誌に相次いで福本主義による学生指導論文が掲載され、大間知も大宮啓二の筆名で「學生運動の新發展段階――早大事件の批判――」を第二号(二七年三月)に発表している。前号の「學生社會科學運動の方向轉換」では中野尚夫(筆名・杉道夫)によって二六年九月以降の学生運動が「全無産階級運動への轉換期」と規定され、なかんずくその第一段階は理論闘争であるとの位置付けがなされていたが、大間知はこの論を継承し、その具体的な事例を大山郁夫の教授職留任問題に際して二七年二月一〇日に設立された早大自治同盟に求めて、運動の経過を「やうやく樹立途上にありし學生運動の指導方針を實踐に於て深め、且つ確立するための最初の試練の舞臺であり、無産階級運動全線への合流のための第一歩を劃せし重要なモメント」と定めた上で、「今や、我が國の無産階級は、組合主義的政治闘争より(社会主義)×××的政治闘争の段階に發展しつゝある」ことを説く。[24]時を同じくして『マルクス主義』二月号には伊吹英一の筆名で石田英一郎が「意識化せる折衷主義とその行方――山川氏最近の諸論文を評す――」を発表している。この中で石田は前年暮れに『報知新聞』に掲載された山川均の「勞働總同盟の崩壞作用と無産政黨の問題」の中から、「私はかやうなる時期においてことさらに日本勞農黨組織

運動に、ある定まつた形と性質とを豫断して押しつけようとするものではない」という部分を引き、「運動をその内的必然の連絡に於て把握せず、單に過去の現象の羅列的記載に止まらるる山川氏にとつて」、「客觀的法則を見究めて之を實現せんとすること……は遂に問題とはなり得ない」と批判する。[28] もともとこの時の山川の言葉は、二六年後半の労働農民党の分裂を経て一二月に加藤勘十、麻生久によって結成された日本労農党の創立趣意書に於ける「中間派左翼」形成が如何に「ブルジョワジーの協力者たる意識的右翼」に吸収されやすいかを指摘した上で、その一方、無産階級的立場の厳守を明言している同党が「意識的右翼」に対する「いつさいの反対勢力を結束して単一な大左翼を結成する」ことを期待した所から生まれたものであったが、ここに見られる大衆運動をモデル化することへの拘泥は大間知、石田ら当時の福本主義者に共通した運動観と考えてよい。[29]

こうした潮流の中で一九二四、五年に『遠野物語』を購入している[30]中野重治はむしろ例外といってよい。二〇年の中野の詩作に福本を経由してルカーチが『歴史と階級意識』の中で強調する〈日常、細部へのこだわり〉が影を落としていることを考慮しなければならない一方で、[31] 中野が当時の福本主義最盛期の新人会にあって、自身の背後にある郷土とその慣習への眼差しを持続させたことを確認する必要がある。後年、『むらぎも』に於いて、新人会合宿所の研究会で自らの郷里の回想を素材にしたスケッチを訥々と語って聞かせる地味な会員を、福本主義の驍将たる活動家たちよりも遥かに重く見たところにその一端があらわれている。[32]

二六年暮れに再建された共産党は大衆団体への影響力を拡大すべく、学生組織、合法無産政党に党員を送り込む。二七年三月中旬から五月中旬まで卒業を跨ぐ形で大間知が「学生フラクション」を主催し、更に浅野の指令で労農党に入党し本部書記として勤務したのはその一事例である。「学生フラクション」は石田英一郎、曾田英宗（東大農学部駒場社研）によって引き継がれ、翌年「三・一五」事件を迎えることになる。[33]

前述の「学生インテリゲンチャ小委員会」を媒介に福本の下に集まった活動家は、この時期を境に検挙され、その後の

獄中転向の過程で分化していく。「二七年テーゼ」以後も党中央事務局長の地位にあった水野成夫は二九年五月、声明「日本共産党脱党に際して党員諸君に」を発表し、党中央委員では初めて転向を行い、門屋、浅野がこれに続く。京都学聯事件により起訴された時点で爵位(男爵)を返上し、控訴審進行中に今度は「三・一五」事件で検挙された石田英一郎は明確な転向の態度を示すことなく、一九三四年釈放される。[31] 福本和夫は一九四二年、刑期満了まで在獄一四年を過ごす。そして二七年暮れより一年志願兵として金沢の歩兵第七連隊に入営中検挙された[32]大間知は、名古屋控訴院で三年の刑が確定し、三一年まで獄中にあった。

対労農党をはじめとした一連の福本主義時代に於ける共産党のフラクション活動が既存の合法無産政党の提携を分裂させ、二八年総選挙での不振に繋がっていったことは周知の通りである。「所謂大衆抱擁性、政治性獲得のため」マルクス主義者が「自ら強く結晶する前に先ず、きれいに分離」[33]することを基調とする福本の「分離結合主義」は畢竟、少数精鋭の党員組織をその担い手する一方で抽象的なモデルから出発し、それによって現実の大衆運動を捉えるという理論上の様式に於いても、新人会出身の活動家の指導者意識と結び付く要素を内包していた。そしてコミンテルンによる「二七年テーゼ」採択の形で、より大きな上からの権威によって山川、福本両派が批判されるや、党指導部が容易に路線転換を行ったこと、そして「三・一五」事件による検挙を経て、福本主義のイデオローグ達が次々と出獄後、翼賛運動へ傾斜していき、離反していった事実は福本の孤立を際立たせることになる。

① 「日本歴史閑談」(『改造』一九四九年六月号) 七三頁、家永三郎との対談。

② 宮崎ふみ子「東京帝国大学「新体制」に関する一考察——全学会を中心として——」(『東京大学史紀要』第一号 一九七九年二月) 八八頁。後藤総一郎監修『柳田国男伝』別冊年譜(三一書房 一九八八年)によれば講演が行われたのは六月二六日から五日間。

③ 『東京大学百年史』(通史二)(東京大学出版会 一九八五年) 三五九頁。

④ 柳田国男「日本の祭」(『定本 柳田国男集』第一〇巻 筑摩書房 一九六二年) 一六九—七〇頁。以下、『定本』と略す。

⑤ 藤井隆至編『柳田国男農政論集』(法政大学出版局 一九七五年)三五九頁。

⑥ 『『ふるさと』と『裸像』——同人座談会の記録——』(桂書房 一九八九年) 三四頁、中井精一他の座談会。

⑦ 菊川忠雄『學生社會運動史』（海口書店　一九四七年）一九七―二〇一頁。組織上はもうひとつ学習単位として設けられた五人から一〇人の「研究会」があり、会員はいずれかの研究会に所属することを義務づけられた（Henry Smith. 前掲　一〇二頁）。

⑧ 菊川　前掲　一三八―九、二五三―四頁。

⑨「学生運動と個人の任務」（『新人會々報』第三号　一九二四年七月）頁数記載なし。丹羽道雄氏所蔵。

⑩ 石堂清倫「大間知君の思い出」（『大間知篤三著作集』第六巻月報　未来社　一九八二年）。以下、『著作集』と略す。

⑪ 大間知篤三「雑記　手紙」（『裸像』第二号　裸像社　一九二五年二月。一九八九年桂書房より復刻）七八頁。

⑫ 中野重治「街あるき」（『新潮』一九四〇年七月号）一九九―二〇〇頁。大間知の母の生家は片口姓であり代々「安」の字を持っている（大間知他、座談会「小説『むらぎも』と新人会時代」〔『中央評論』一九五四年一二月号〕七九―八〇頁）。

⑬ 菊川　前掲　三二〇―三二二頁。

⑭ 林房雄「文学的回想」（『林房雄著作集』第二巻　翼書院　一九六九年）二三七頁。学友会は学部別の学生自治組織のこと。二三年五月、新人会のはたらきかけによって、学友会内に誕生したのが社会科学研究会であり、いくつかの分科会にわかれ、カウツキー『マルクスの経済学』（チューター・山田盛太郎）、ブハーリン『史的唯物論』（同・平野義太郎）など、殆どがマルクス主義を主題としていた。佐々木彦一郎も一時、これらの読書会に参加していた（石堂清倫『中野重治と社会主義』勁草書房　一九九一年　三二頁）。

⑮ 石堂清倫『異端の視点』（勁草書房　一九八七年）一九七頁。

⑯ 一九九二年三月七日、石堂清倫氏からの筆者聞き取り。

⑰ 石堂清倫「新人会の名幹事長」（『民間伝承』一九七〇年七月号所収「大間知篤三追悼記念特集」〔以下、「追悼特集」と略す〕一〇五頁）。幹事長の主たる業務は学期毎の総会に於ける経過報告と爾後方針の決定、高校部（各高校社研への連絡機関）に対する指導、月例の会内班活動での聴問がある。対外面では学聯の指導、労組との連絡調整、特に労働争議・研究会への人材派遣が挙げられる。任期は通常一学期だが、大間知は二学期間この任にあった（前掲　石堂氏からの聞き取り、「丹羽道雄氏に聴く2」〔『ノート』第一一号　一九八九年〕一七八頁）。

⑱ 石堂清倫『わが異端の昭和史』（勁草書房　一九八六年）六八―九頁。二八年には、まず出身校別の読書会、更に進んでマルクス主義の勉強がしたい者は社会科研究会へ、次いで一定の条件審査を経て新人会入会という段階制が出来上がっていた（九二年一一月二五日付、丹羽道雄氏より筆者宛書簡）。丹羽氏は二八年当時の新人会幹事長。

⑲「徳田球一外三十六名治安維持法違反被告事件予審決定書」（『現代史資料14　社会主義運動3』みすず書房　一九六五年）一三一頁。以下、「徳田決定書」と略す。石堂　前掲「新人会の名幹事長」（「追悼特集」）一〇五頁。及び前掲　石堂清倫氏からの聞き取り。在学中、大間知は『無産者新聞』の手伝いで何度か同紙編集室を訪れており、そこで橋浦泰雄の知遇を得ている（橋浦泰雄「冥土の報告待っている」『著作集』第二巻月報　一九七五年）。

⑳ 石堂清倫「思い出すままに」（中野重治、原泉、石堂清倫編『西田信春書簡　追悼』土筆社　一九七〇年）二七七―八頁。小論は新人会出身者を中心としたものだが、福本和夫、石田英一郎はそれに該当しない。しかし両者が二〇年代に示した新人会への関与は多大であるため、叙述上同列に扱うことにした。

㉑「学生インテリゲンチャ小委員会」については、『日本社会運動史料／機関紙誌篇　政治批判（4）』（法政大学出版局　一九九〇年）所収

の梅田俊英氏による「雑誌『政治批判』とその周辺」に綿密な考証がある。これら六名以外に是枝恭二、冬野猛夫の参加が推定される（同書　二二九頁）。

㉒ 福本はその第六、七回の予審調書（梅田　前掲「雑誌『政治批判』とその周辺」二二五頁所載）で「小委員会統制下ニ雑誌政治批判ヲ創刊シテ、当時吾々ノ陣営ニ甚タシク欠ケテ居タ国際情勢ノ知識ヲ普及スル為メ、特ニコミンテルンノ国際情勢ニ関スル宣伝煽動文ヲ翻訳掲載セシメ、兼ネテ国内ノ政治経済情勢ノ批判分析ヲ行ハセシメタノデアリマシタ」としている（句読点は調書原文になし）。

㉓ 松浦行真『人間・水野成夫』（産経新聞出版局　一九七三年）二〇二頁。

㉔ 大宮啓二（大間知篤三）「學生運動の新發展段階――早大事件の批判――」（『政治批判』第二号　政治批判社〔『日本社会運動史料／機関紙誌篇　政治批判（1）』法政大学出版局　一九八八年〕）一五七、一七七頁。なお、原文には数カ所傍点が付されているが、ここでは割愛した。注㉕の相当部分も同様。

㉕ 伊吹英一（石田英一郎）「意識下せる折衷主義とその行方――山川氏最近の諸論文を評す――」（『マルクス主義』第三四号〔『日本社会運動史料／機関紙誌篇　マルクス主義（6）』法政大学出版局　一九七二年〕）九―一〇頁。

㉖ 山川均「勞働總同盟の崩壊作用と無産政黨の問題」（『報知新聞』一九二六年一二月二四日）。

㉗ 中野重治「柳田国男」（『朝日新聞』一九六七年一一月二〇日）。この他、三二年から三四年の豊多摩刑務所に入獄中、中野は備付けの「官本」での柳田の『雪国の春』を熟読した。

㉘ Silverberg, Miriam. *Changing Song: The Marxist Manifestos of Nakano Shigharu*, Princeton University Press, 1990, pp. 63-64.

㉙ 中野重治「むらぎも」（『群像』一九五四年五月号）六七―七二頁。この『むらぎも』に於ける中野の人間形象については、石堂清倫「〔むらぎも〕雑考」（『ノート』第一一号、一九八九年）五八頁参照。同論考に於いて石堂氏は、「むらぎも」で最も多く頁数が割かれている平井（モデルとなったのは中平解氏）の郷里（中平氏の故郷は愛媛県宇和島近郊だが小説中では土佐）での少年時代の回想を中野が重視した点を引いているが、換言すれば後年、中野が当時の新人会に欠如していた郷土への眼差しを平井の中に求め、再構成したと言えよう。尚、前掲『中野重治と社会主義』（初版）の「人名索引」で中平氏は「平田」という項目で記載されているが、これはやはり「むらぎも」に登場し、大間知、中野とともに『裸像』同人だった新人会会員・中井精一のことであり「人名索引」の誤記というべきである。

㉚ 記録上の「学生フラクション」の討議内容は「（一）學生社會科學聯合ヲ確立指導シ更ニ一般學生ニ對シテモ直接ニ働掛クコト、（二）學生ニ對シ「マルクス」主義ノ宣傳ヲ爲スコト、（三）學生ノ「マルクス」主義研究ノ基準トナルヘキ研究「コース」ヲ作成スルヘキコト」（前掲「徳田決定書」一七二頁）と要点を欠いたものだが、堅山利忠「革命インテリゲンチャの時代」（石堂清倫・堅山利忠編　前掲『東京帝大新人会の記録』）二五三頁所載の曾田英宗より堅山宛書簡によれば、信頼できる学生活動家の人物資料作成が目的だった。

㉛ 石田の処遇が比較的穏便だったことは、「三・一五」事件直後の警保局長・横山助成が石田の義兄だった点を考慮する必要がある。

㉜ 「七聯隊候補生の下宿で共産党の秘密文書」（『北國新聞』一九二八年五月一一日）。但し「大町」と誤って記載。筆者は大間知の裁判の判決文閲覧を希望し名古屋高等裁判所、同高等検察庁に問い合わせたが、所在は確認できなかった。

㉝ 北条一雄（福本和夫）「『方向轉換』は如何なる誘過程をとるか、我

史料／機関紙誌篇　マルクス主義（3）』法政大学出版局　一九七二年）二六二頁。

々はいまそれのいかなる過程を過程しつつあるか――無産者結合に關するマルクス的原理――」（『マルクス主義』第一八号〔『日本社会運動

第二章　柳田国男のもとで

第一節　「木曜会」に於ける師弟関係

一九二〇年代後半は柳田国男もまた、学会という組織の中で分裂の渦中にいた。一九二九年七月に折口信夫、岡正雄、早川孝太郎らの肝入りで「民俗学会」が設立され、機関誌『民俗学』が発刊する。本来、柳田はその中枢に置かれて然るべきだったが、柳田は入会を拒否したのみならず『民俗学』に一度の寄稿も行わないという態度を貫く。この対立の遠因は、一九二八年『民俗学』の母体となった『民族』誌上で岡、早川らとの間に編集上の対立があった所にまで遡ることができるが、[1] 人間関係上の確執に付随して、この頃から柳田は科学としての民俗学の領域をそれまで以上に意識し始め、その矛先を隣接する分野、とりわけ民族学に向け始めたことにも求められる。緊張した関係の中で、柳田は自分の手で系統だった民俗研究の方法を確立し、併せてそれに沿う形で研究者を養成する必要に直面していた。一九三三年、折から共立社企画の『現代史学大系』の一冊を分担することになった柳田は、口述形式で同年九月一四日から三ヵ月にわたって連続講義「民間伝承論」を行い、当時柳田のもとに出入りしていた学徒がここに参加する。

記録の上で大間知が初めて柳田の前に登場するのは、この第一講の聴講者としてである。[2] 三一年に保釈されてから大間知はしばらく郷里の富山で静養した後、上京して新人会の先達にあたる大宅壮一の所に身を寄せ、『千夜一夜』翻訳団の一人として訳業に従事していたが、この連続講義に集まった顔触れが、いずれも柳田とは旧知の間柄である橋浦泰雄、比嘉春潮、などである所からみて、聴講以前から交渉があったと見る方が妥当である。翌三四年四月、連続講義のメンバーを中心に「木曜会」が結成され、以後定期的に柳田が指導を行う機構が出来上がる。三五年に入ると「民俗学会」との対

立も、折口らが『民俗学』を四月をもって廃刊することで緩和され、同年七月から八月にかけて開催された日本民俗学講習会の成功とともに会期中の八月三日、地方の研究者をも盛り込んだ全国規模の連絡体設立の案がまとめられ、「民間伝承の会」及びその機関誌『民間伝承』として具体化したことについては多言を要しない。民俗学外部の眼から見ても、「木曜会」の成立に到る過程は、柳田自身が民俗学の独立性についてはっきりと自信を持ち、その意味でこの頃に柳田の所へ集まった学徒こそが明確に柳田の弟子と言い得る人々であった。[3] 他方、新人会時代の大間知を取り巻いた思潮と比較する時、柳田の調査方法とはあくまでも「出來るだけ多量の精確なる事實から、歸納によつて當然の結論を得[4]」る点で対照を成すものであった。そしてかかる論理に立脚した研究組織の一員に連なる時、それは教えを乞う側が「多量の精確なる事實」の採集を担当し、それを持ち帰って師の論評を仰ぐという硬直した関係の中に取り込まれることをも意味していた。三四年一月、大間知は正に柳田の意に沿う郷里・富山の年中行事を直截にまとめた採集報告（「越中の神事その他」〔『旅と伝説』一九三四年一月号〕）を以て斯界への第一歩を記す。

具体的な民俗調査を柳田傘下の弟子が担う関係は、一九三四年から始まる「全国山村生活調査」、「海村調査」の中でより確固としたものとなる。各人が携帯した採集手帳の冒頭に「なるべく話者の言葉のまゝ（方言等）を保存して下さい[5]」とあるように、民俗語彙を重点に有るがままの採集報告を期待したものであった。「木曜会」に集まった人々は、既に一〇年近いフィールド歴のある橋浦泰雄を別格にすれば、調査開始時点で未だ実地経験に乏しい者がほとんどで、各々の調査自体が試行錯誤の連続であったが、大間知の採集手帳が持つ記載事項の周密度は、短期間に於ける大間知の民俗採集の方法論体得を示している。総計百個の質問項目の選定は全て柳田が行い、その中には調査者の側から見て選定理由に納得のいかないものも散見されたが、[6] そうした疑問も「村が從來如何なる種類の法則によつて、久しい間その結合を続けて居たか[7]」という柳田の立てた大きな問に吸収されていった。

「山村生活調査」が漸く蔗境にはいった一九三六年四月、曾て新人会会員であり、石田英一郎を柳田に紹介した人文地

理学者・佐々木彦一郎が病没する。死後、有志の手で編まれた遺稿集の「追悼篇」に柳田も「境を歩む人」なる一文をよせているが、病軀をおして採集活動に尽瘁した少壮の学者を悼む文章であるにも拘らず、その筆調はまず一般論として、「大学の寵児たち」の「結論さえ明敏に把握すれば、過程は人に委ねて可なりとする態度」を指摘した上で、佐々木の民俗に対する直観力の鋭さを評価しつつも、彼の「多くの仮定の中から特に面白かろうと思うものを、急いで結論として採択しようとする傾き」[8]を難じた厳しいものである。民俗学が一個の学問領域として揺籃期にあることを過剰に意識していた当時の柳田にとって地理学との重複部分から自身の創見を汲みだそうとする佐々木の姿勢は、自己の領分から外れるものとして映ったことを窺わせる。そしてこの口調は佐々木とは比較にならぬ度合いで新人会の活動に関与した大間知にも向けられ得るものであった。

この時期にあって大間知は民俗語彙の収集、分類に没頭し、柳田の期待に応えている。柳田と共著の『婚姻習俗語彙集』（三七年）はこの時の成果のひとつである。柳田への傾倒振りを示す傍証として、一九三五年一〇月、創刊間もない『民間伝承』第二号の中で、大間知が「山村生活調査」の成果を自分なりに言いかえて、「日本僻陬諸村における郷黨生活の資料蒐集調査並に其の結果の出版」として、「日本人の美質或は長所と稱せられつゝ然も由來の明らかでないことどもを出來るだけ具體的に調べ上げることである」[9]と敷衍したところ、この一文が三九年六月、同じ誌上で山口麻太郎によって「個々の生活事象は村の生活から遊離して取扱われ、村の性格は考慮される事なしに資料価値が決定せられ、各個の郷土生活事業は生活の基準を離れて研究所の試験管に並べられて居る様な氣がする」[10]と批判される。

しかしこの一文から約一年を経て発表された「採集方法の種類」の末尾で、大間知は「また個々の民俗をばらばらに掻き集めるのではなく、それが村全体とどんな関連にあるのかを知ることが必要である」、「一〇日や二〇日、村に滞在しても分かる部分は少ない」と婉曲ながら「山村生活調査」を批判する。[11]無論、地方在住の民俗学者の眼から見た、柳田を頂点とする中央の民俗学による資料操作に対する批判という側面を持つ山口の所論と、あくまで方法上の問題として、項目

別の民俗採集の弊を批判した大間知とを同列で扱うことはできない。だが、この一見隔たりのある大間知の主張は、柳田の傘下で民俗語彙編纂に励む一方で、方法上の懐疑を抱いていく様相を端的に示すものであった。

第二節　国民思想研究所――もう一つの思想環境

一九三六年、柳田は大間知の紹介で浅野晃を知る。[12] 浅野は「解党派」（日本共産党労働者派）解体を余儀なくされ、前年に水野成夫らとともに相次いで自首して執行猶予の判決を受けており、爾来、筆耕生活を送っていたが、柳田と会って間もなく、当時訳業にたずさわっていた水野を柳田に引き合わせ、[13] 両者はアナトール・フランスについて歓談している。[14] ヨーロッパ土俗信仰の心象風景をアナトール・フランスから摂取し、晩年に到るまでその著作を手に取ることが多かった柳田にとって、それは刺激的な出来事だった。これらの転向組を含め、既に政治活動から遠ざかっていた新人会出身者と柳田が接触する過程は、彼らが「民間伝承の会」に入会したことで、形式的にせよその動態を描くことができる（次頁参照）。勿論ここに並んだ講読者の行程は様々であり、社会学者・喜多野清一、仏文学者・中平解などの入会は政治的動揺の所産ではない。会設立当初からの維持会員は措くとして、明らかに政治離脱者の範疇に入るのは水野、浅野、そして転向出獄後は大間知と同様、大宅壮一の翻訳団の一員となった福間敏男である。三四年五月に出獄した中野重治は、三八年ナップ（全日本無産者芸術聯盟）時代、交流のあった橋浦泰雄の満五〇歳の会の席上、初めて柳田と出会うが、その一年前、既に入会している。[15]

こうして柳田の周囲に曾ての新人会会員が集まってくる中で、前節で瞥見した大間知の潜在的な師に対する異論は、単に方法上の疑問ではなく、自らの視点の提示を以てあらわれることとなる。「木曜会」のメンバーは、「民間伝承の会」の設立要因のひとつである専門的な研究者集団への対抗という柳田の視座を反映し、少数の例外を除いて研究と仕事の二足の草鞋を履いている点に於いて共通しており、この時点では依然としてアマチュアの学問集団であった。その中にあって

新人会出身者による創刊当時の『民間伝承』購読状況

氏名（卒業年度）	新入会員として名前の載った号	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	備考
守随一（1928）	創刊当時から維持会員につき，掲載されず	9.21 (1.00) 12.22 (1.00)	9.29 (4.00)				1938. 秋に渡満 1944.1.15 死去
佐々木彦一郎（1926）	創刊当時から維持会員につき，掲載されず	10. 6 (0.50)					1936.4.10 死去
大間知篤三（1927）	創刊当時から維持会員につき，掲載されず	10.21 (1.50)	2.11 (3.00) 10.13 (0.50)				1939.2. 渡満
石田英一郎（1926京大中退）	創刊当時から維持会員につき，掲載されず	10.19 (0.50) 11.24 (0.50)	1.26 (1.50) 9.15 (1.20)		1.13 (3.00)		1937～39ウィーンへ留学
福間敏男（1925）	第一巻第二号（1935.9.18）	9. 9 (0.60)	3.23 (0.60) 10.23 (0.60)	3. 2 (0.60)			1937.8.29 死去
中平解（1927）	第一巻第二号（1935.10.20）	12.22 (0.60)	8. 1 (0.60)				戦後，同誌世話人
浅野晃（1925）	第一巻第八号（1936.4.20）	4. 7 (1.00)	9. 1 (1.00)	8.10 (1.00)		3. 4 (1.00)	戦後，同誌世話人
石田外茂一（1926）	第一巻第一二号（1936.8.20）		8. 1 (0.50)				
喜多野清一（1925）	第一巻第一二号（1936.8.20）		8月講演会の時現金支払 (1.20)				1943.3.31 (4.70)
満岡忠成（1930）	第二巻第二号（1936.10.20）		10.13 (0.60)	7.27 (1.20) 8.14 (1.20)	8.31 (1.20)		
中野重治（1927）	第二巻第八号（1937.4.20）	講読料記載事項なし					
水野成夫（1924）	第三巻第四号（1937.12.20）			11.23 (0.60)			1942.5.25(10.00) 橋浦あて現金書留
小沢正元（1925）	第三巻第五号（1938.1.12）	講読料記載事項なし					

『民間伝承』第一巻（第一巻第一号～第三巻第三号） 国書刊行会 1972，および「『民間伝承』金銭出納帳」（成城大学民俗学研究所所蔵）より作成。各年のカッコ内は支払った講読料(円)を示す。石田英一郎は新人会出身者ではないが，表に加えた。「民間伝承の会」昭和11年「本会小規」では普通会員月額10銭，維持会員月額50銭。会員には『民間伝承』が無料配付される。

大間知が大孝塾研究所なる左翼思想犯保護団体で糊口をしのいでいたことは注目される。

大孝塾研究所は一九三四年一月、時の司法次官・皆川治広によって設立され、三年後に帝国更新会の国民思想研究所がその業務を引き継ぐこととなった転向者施設であり、[16]「左翼思想犯の中より學者的、教授的な者を選んで之に思想の科學的な研究を爲さしめ」[17]ることを目的としていた。設立の契機は皆川が名古屋控訴院で検事長の任にあった一九二九年当時、八高（第八高等学校）社研事件を目の当たりにし、年少有為の学徒の思想善導を急務と考えたことにあったが、[18]大間知の控訴審がほぼ同じ頃、名古屋控訴院で進行中であったことを照合すれば、当時、帝国更新会思想部保護委員だった小林社人の根回しもさることながら、名古屋の地縁が大間知の大孝塾研究所入所を容易にしたものと考えられる。[19]

一九三五年八月には浅野晃、門屋博を加え、[20]小林を世話役として新たに国民思想研究所が創立され、大間知もそのまま所員として留まる。そして三九年三月、与えられた業務の一環として同研究所から『日本家族制度の研究』を上梓する。柳田から離れた場所で構想、執筆されたこのパンフレットは、多くの面で大間知の置かれていた位置というものを活写している。柳田の『地名の研究』（一九三六年）を参考にしながらも、この小冊子の中で大間知は、自ら行った民俗調査の中から一九三八年三月に行った八丈島に於ける採集結果を手掛かりに、同島に色濃く残った隠居制が「親が隠居して別屋に移り住むまで、息子夫婦は同居せず、聟はいつまでも妻の許に通つて婚姻關係をつづけるといふ慣習」が顕著であることを摘出し、「父子二代の夫婦が婚舎を分ち世帯を分つといふ生活原則が、隠居の一つの直接的動機となつて居るのではないか」[21]という後に自身の民俗学の主題となる問題を提出している。日本家族制度考察の際、隠居制が一つの指標を占めるという大間知の創見は、それまでにも「隠居田」、「隠居部屋」に相当する民俗語彙に重点を置き、慎重に言葉を選んで提出されていたが、[22]ここでは民俗語彙による分類法とは別個の、対象となる習俗からその属性を分離して、構造的に把握する姿勢がはっきりと示されている。

だが、大間知がこうした着想を躊躇なく述べることを可能にした大孝塾、国民思想研究所は、同じ論考の中で大間知が

「日本の家の協同性は國家にまでその限界を擴大して居り」、「皇室を總本家と仰ぎまつる一大家族國家であるといふ觀念によつて貫かれて居ることが、本質的な點である」[22]という叙述を行わざるを得なかった思想機関でもあった。大孝塾及び国民思想研究所と「民間伝承の会」が互いに隔絶した組織であった訳ではない。「木曜会」の終了後、論題を掘り下げて討議するため、「木曜会」のメンバーは頻繁に同所の大間知の研究室に集まっていたし（橋浦泰雄前掲「冥土の報告待っている」）、恐らくはその返礼として、贈品が会から塾へ定期的に送られていた[23]。しかし柳田民俗学への方法上の対峙という点で、国民思想研究所は翼賛運動への傾斜を含みながら、まぎれもなく大間知にとって民俗学上、自らの意見を述べることの出来るもうひとつの思想環境たり得たのである。

① 後藤監修　前掲『柳田国男伝』七六四―六五、七五九頁。

② 柳田国男『定本』別巻第五（筑摩書房　一九七二年）一七二頁。大間知がいかなる人脈で柳田の交流を持ったのかについては、橋浦泰雄と大間知は第一章注⑲に見るように検挙前からの知り合いであったため、橋浦を介した可能性が強い。

③ 岡正雄「柳田国男との出会い」（『季刊　柳田国男研究』創刊号　一九七三年春　白鯨社）一四〇頁。一九九二年八月二五日、牧田茂氏からの筆者聞き取り。「木曜会」には決まった会則はなく、「会員」という呼称もなかった。常連は「民間伝承論」の聴講者だが、その紹介を経れば出席は可能であった。

④ 柳田国男「郷土生活の研究法」（『定本』第二五巻　一九六九年）三二五頁。一九三一年六月の伊勢神宮皇学館での講演を基礎とする。

⑤ 柳田国男、比嘉春潮、大間知篤三、守随一編『山村海村民俗の研究』（名著出版　一九八四年）所収「採集手帖（昭和九年度）」四頁。この注意事項の作成にあたったのは、佐々木彦一郎であった（「座談会　五〇年前の山村調査」（成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版　一九九〇年）三四二頁）。

⑥ 一九九二年九月一五日、平山敏治郎氏から筆者聞き取り。平山氏が挙げたのは、「変人とか奇人とか言はれる人がありましたか。変ったことで評判になって居た人の話がありますか」、「疲労とか衰弱を表はすことばがありますか」（各々、昭和一〇年度の調査では質問番号二六と七九）であるが、採集する主体によってこの種の疑問は異なり、且つ広がっていたはずである。三四年に出獄し、翌年「木曜会」に出席した石田英一郎が調査報告を聞いて、寸断された採集項目が一体何の目的に連なるのかと質問し、柳田から叱責されたことは直接柳田の指導を受けていないマルクス主義活動家の反応としては自然なものだった（石田英一郎「はみだした学問」『石田英一郎全集』第四巻　筑摩書房　一九七〇年　一二―三頁）。

⑦ 柳田国男「採集事業の一期」（『定本』第二五巻　一九六九年）五二六頁。初出は「山村生活調査第一回報告書」（一九三五年三月）。

⑧ 柳田国男「境を歩む人」（『定本』第二三巻　一九六四年）四五八頁、初出は同じ題名で、『佐々木彦一郎遺稿と追憶』（白猫社　一九三八年）

に発表。一九三四年一月初旬、大間知を始めてフィールド・ワーク（千葉白浜）に誘ったのは佐々木である。佐々木が提出した「島の個性」の問題、すなわち各方面からの移住者によって構成される島に一様な生活上の個性があるなら、「島の自然の個性が人みずからがつくる文化の作用よりも強い」（『民間伝承』第三号　一九三五年一一月二〇日）という視点は、戦後離島を中心にフィールド・ワークを重ねた大間知に影響を与えたと考えられる。

⑨ 大間知篤三「民間伝承論」から「民間伝承」まで」（『民間伝承』第二号　一九三五年一〇月二〇日）一頁。

⑩ 山口麻太郎「民俗資料と村の性格」（『民間伝承』第四巻第九号　一九三九年六月一日）。山口は壱岐島在住の民俗学者。本来この反論は大間知が行うところだったが、この時既に渡満していたため、関敬吾によって同じ紙面で、一つの村とはあくまで「民俗学の出発点であって目的ではない」との見地から反批判が行われる（「批判に答へて」）、後年、関はこの執筆を柳田の要請で書いたと述懐している（成城大学民俗学研究所　前掲「座談会　五〇年前の山村調査」三五六頁）。

⑪ 大間知篤三「採集方法の種類」（『著作集』第三巻　一九七六年）二二三頁。初出は『近畿民俗』一九三六年一二月号。大間知が調査の過程で役場に統計表を取りに行ったことに対し、柳田が生活信仰を知る上で何ら役に立たないと注意した逸話が残されている（成城大学民俗学研究所編　前掲「座談会　五〇年前の山村調査」三四七頁）。

⑫ 後藤監修　前掲『柳田国男伝』九〇二頁。

⑬ 浅野晃「文学的回想」（『作品・水野成夫』産経新聞社出版局　一九七三年）四四三頁。

⑭ 中野重治との対談「文学・学問・政治」（『展望』一九四七年一月号）の中で柳田は外国の本で一番影響を受けた書物としてアナトール・フランスをあげている。

⑮ 中野　前掲「村の家」（三五年発表）の祖型となった、筆を折って百姓となれ、という父からの説得を受けた事実は中野の三四年八月九日の日記から推定できる（中野重治『愛しき者へ』上　中央公論社　一九八三年　四二六頁）。

⑯ 小林社人『「転向期」のひとびと』（新時代社　一九八七年）一二三―五頁。

⑰ 長部謹吾「思想犯の保護に就て」（『司法研究報告書』第二一輯第一〇　一九三七年）三九七頁。

⑱ 一九九二年一〇月二一日、皆川広宗氏（皆川治広・子息）から筆者聞き取り。皆川の名古屋控訴院検事長の在任期間は、一九二七年一〇月から三一年一二月まで（戦前期官僚制研究会編　秦郁彦著『戦前期日本官僚制の制度・人事・組織』東京大学出版会　一九八一年　二二七―八頁）。

⑲ 一九三四年一月一二日、皆川は帝国更新会に小林を訪れ、大孝塾研究所の所員となるべき人物の推薦を求め、これが契機となって大間知もこの人選にはいった（小林　前掲　一二三頁）のであるから、大間知の入所は「木曜会」への出入りよりも後ということになる。

⑳ この他、同所所員の新人会出身者は、村川藤四郎、松本広治、福間敏男（但し、三七年八月死去）がいる。三五年に浅野晃が大孝塾研究所に大間知を尋ねた時、ウェスターマークの『人類婚姻史』、フレーザーの『金枝篇』が書架に並んでいたことを確認している。この時の来訪が機縁で浅野も入所することになる（浅野　前掲「戦前の思い出から」『著作集』第三巻月報　一九七六年）。

㉑ 大間知篤三『日本家族制度の研究』（『国民思想パンフレット』第六輯　国民思想研究所　一九三九年）四〇頁。

㉒ 大間知篤三「隠居の資料」（『著作集』第一巻　一九七五年）。初出は「会員通信　隠居」の題名で『民間伝承』一九三六年八月号に発表。

この中で大間知は「山村調査」で採集した関係語彙を踏まえながらも家族制度研究上「傍系親族をまで一家族に包容しかつ一つの竈の飯で生活する大家族が一方にあるのに対して、直系親族にいたるまで世代別に竈を分かって生活する隠居制が、遙かに広い範囲にわたって分布していることは大きな問題である」（四一三頁）としている。

㉓ 大間知　前掲『日本家族制度の研究』七―八頁。この部分は同書を改題した『著作集』所収の「家についての覚書」からは削除されている。

㉔ 『民間伝承』金銭出納帳」（成城大学民俗学研究所蔵）によれば以下の如くである。一九三六年八月一五日、五〇銭（内容不明）／三七年七月二六日、一円八〇銭（御中元石鹸）／三八年六月二一日、四円四〇銭（紅茶二鑵）／三八年七月二〇日、二円六〇銭（菓子）。

第三章　戦時下の「民間伝承の会」

第一節　『アジア問題講座』の周辺

一九三九年から四〇年にかけて論壇にあらわれてくるアジア主義の潮流は柳田と大間知の両者から比較民俗学という同種の関心を引き出すとともに、その反面に於いて大間知が柳田に対して持っていた方法上の違いを明らかにする役割を果たした。

周知の如く柳田は大正末期、自己の民俗学を「独り同胞日本平民の前代に付て、より精確な理解を得るに止まらず、更に之を他の比隣民族の生活と比較」することを将来に向けて希求するものと位置づけており、とりわけ東南アジアの諸民族を射程に置いた「何れも日本の學問が明るくなるならば、少しは自分たちのどうして貧しく又哀れであるかの、隠れた原因が知れるであらうかと、待つて居るらしき様子が見える」[①]という言葉に見る如く、その基層に政治意識を秘めている点に於いて、勃興しつつあった日本による異民族嚮導の理論としてのアジア主義に呼応する要素を含んでいた。だが、そうした外的誘因にしばしば反応しつつも、戦時に於いて柳田が見せた「比較民俗学」への取り組み方で一貫しているのは、まず日本の民俗事象を手掛かりにして、他の民族の有する民俗を並列に置くという段階に自らを止め、「寧ろ生活様式のそれぞれに異なるを當然とし、些々たる皮相上の偶合に驚いたり喜んだりせず」[②]それらを統一して論断することについて

は自制していた点である。

この姿勢は戦時中の柳田が民俗学の上で、時局に対してはたらきかけた発言の最たる例としてしばしば引かれる一九三九年から四〇年に創元社から刊行された『アジア問題講座』の第一巻『政治・軍事篇（一）』（一九三九）に「巻頭言」として寄せた「アジアに寄する言葉」[3]に於いても同様である。この中で柳田はアジアに於いて「古来ひそかなる交渉」が行われてきた傍証を、日本の説話と類似した昔話がアジア規模で散在していることに求める。そして比較照合のための道具として漢字の持つ有効性を強調し、「常民の最も心の奥にひそむものを、これによつて突合せて見ることは、五族協和の理想のためにも必要な仕事であつた筈だ。東亜の新しい秩序の礎石も、案外かやうな處にあつたかも知れないのである」（同書　一―三頁）と結ぶ。「五族協和」という言葉を織り込みながらも、対象となる民俗素材を「突合せて見る」以上の論及を行わない筆調は平素、一国民俗学の充実を唱道し、「少なくとも自分たちの資料の比較の基礎になるものだけは、十二分に精確に又判り易く分類整理して、いやしくも臆説獨断の入込む餘地の無い」[4]ようにしたいことを力説する柳田と矛盾するものではない。だが、普段の慎重さに似合わず、アジア規模での比較民俗学を説く柳田のこの高揚は、同講座の編集顧問を務めていることと合わせて[5]、いかなる経過を以て、柳田が『アジア問題講座』に関わったのかという疑問を生ぜしめる。

編集委員の一人に水野成夫が名を連ねていることは、同講座の人選に新人会の旧「解党派」が関わっていたことを示す。本来、『アジア問題講座』の淵源は一九三七年秋、当時日本評論社に居た石堂清倫が「支那問題」講座の名前で「アジアの諸民族を非武力的手段によって結合する道はありうるか」[6]という意図から、既に知己となっていた尾崎秀実と新しい研究者の結集を計った所にまで遡り、その後稿料問題から日本評論社からの刊行が不可能となったため、企画を尾崎が譲り受けた来歴を持つ[7]。「支那問題」講座の段階でも尾崎は執筆者の選定には極めて神経質であり、左翼色の強い人物の参入は極力抑える方針を堅持していたが、柳田の名前は上がって来なかった[8]。従って柳田が執筆者として浮上してきたのは、

尾崎が水野ら新人会出身の「解党派」と結んで以降と見るのが妥当である。一九三八年秋、作家として武漢作戦に従軍していた浅野晃が水野からの電報で急遽帰国し、『アジア問題講座』の編集協力を求められた時点で、既に編集は実質的に水野ら旧「解党派」の手に移っており、執筆者の顔触れは尾崎の意を汲み取りながらも、実際の執筆依頼を担当したのは水野と浅野だった。[9] 版元となった創元社は三八年より柳田の著作が『創元選書』として刊行中であり、[10] また同時期には浅野の訳出した岡倉天心『東洋の思想』（三九年）、アラン『教育論』（三七年、水野・浅野共訳）が刊行されており、双方が相即する条件は整っていた。創元社は当時まで『アジア問題講座』のような時事問題を扱った企画は経験が浅かったことから見ても、[11] この企画が水野、浅野によって持ち込まれたことは間違いない。そしてこの二人の他に、編集事務に従事したのが、やはり新人会出身で旧「解党派」の一人である喜入虎太郎、他に大間知篤三であった。[12]

編集以外に彼らが各々この講座に寄稿した中で浅野はアジアでの「自己の古典精神を回復するルネサンス的役割」を強調し、その典型を明治維新に求め「印度および支那の現代思潮を大觀して、そこにやはり此の型が支配してゐる實景をおおいなる希望を以て眺めるのである」、「現代アジア思潮の混沌を貫くアジア復興のミトスは日本によつて——日本の決意と實踐によつて——與へられなければならぬだらう」[13] と、「日本浪漫派」領袖としての日本回帰を如実に示している。日本がアジアを指導するというこの主張は、軍国主義の潮流に誘発されたもので、新人会時代の彼の主張とその指導者意識の表出に於いて同形異類である。浅野のようにあからさまな政治的な提言ではなく、民俗学の論考の枠内でなされているとはいえ、大間知の思考もまた、この局面では新人会時代の面目を取り戻して、包括的法則の呈示という形をとる。同講座第九巻に大間知の寄せた「支那の婚姻」の第一節で彼は、通婚範囲の制約によって外婚制と内婚制の別を前提にした上で、「人口周密にして姓数甚だ少ない支那において」、同姓不婚の原則が「その本来の姿であるところの同宗間に限らざるをえないことになつた」変遷を典拠に、その傾向を敷衍して「支那とは限らず世界全体を通じて、内婚制並びに外婚制の将来に関して」、「内婚圏は一般的に漸次拡大され……全人類的一単位の通婚圏に進まんとしてする傾向をもつているの

である」と展望する。[14] こうした大間知の思考法は新人会時代に培われ、柳田との師弟関係の中で後景に退くものの、捨て去られることなく戦時に於ける比較民俗学興隆の機運に対してはかならずも再び表に出たといえよう。『アジア問題講座』は政治活動離脱後も大間知が水野、浅野ら新人会の旧「解党派」と持続した交流を成立要因のひとつに持つとともに、柳田もまた自らの民俗学の領分を守りながら、これに呼応した点で両者が収斂した場としての位置を持つのである。

第二節　時局下の柳田門下

『アジア問題講座』の刊行が始まった三九年二月、大間知は満州建国大学（以下、建大と略す）へ赴任する。直接の要因は金沢歩兵第七連隊の上官で軍法会議に附された大間知のために奔走し、三六年以来、関東軍参謀として構想の段階から建大設立に関与してきた辻政信の慫慂によるものであった。[15] 大間知に先立って前年一〇月に新人会出身の守随一が満鉄新京支社に着任しており、大連では守随の歓待を受けている。[16] この地で大間知は満州で柳田との相違点を鮮明にしていく。当初の分担はドイツ語であったが、並行して建国大学研究院で「民族研究班」に所属し、[17]「満洲ニ於ケル民族ノ研究」を主題に敗戦までの六年間、同地で民族調査に従事する。既に渡満以前の段階から柳田の民俗調査への疑念を抱いていた大間知の視点は、ここで多様な言語系統によって民俗語彙を媒介にする調査方法からの乖離を更に深めることとなる。一九四四年一月に『満洲民族学会会報』に大間知が発表した「オボ調査標目」は、対象を地縁・血縁集団単位による共同祭祀の祭壇（オボ）に絞って、素材となる祭祀の構造、目的、機能を明確に把握することを指標にしたもので、個々の民俗事象の名称はあくまで補足的に位置付けられている。[18] その反面これら調査の背後に翼賛的なアジア主義が影を落とし、大間知自身、一方で「北方アジア全域にわたる民族政策を確立するため」の研究設備の充実を説いている。[19] こうした立場は国民思想研究所、建大という研究機関を受け入れることで、柳田に対する異論の展開が可能となった大間知に与えられた桎梏でもあった。

一方、一九二〇年代後半の新人会出身の政治活動家群像と柳田民俗学の交錯は、一九四二年四月に福本和夫が出獄することで、漸くその全貌を見渡すことができるようになる。

刑期が満了するまでの福本の動向は、四二年三月九日の「豫防拘禁請求事件抗告理由」が示す如く、「依然トシテ共産主義ヲ信奉シ來リ本件（予防拘禁請求――筆者注）審理開始ニ際シ始メテ共産主義運動ヨリ離脱スベキ旨表明シ」[20]たことが明らかになっている。この背後には一部に予防拘禁延長に伴う保護観察所入りへの危惧[21]があったほか、遠くは「二七年テーゼ」による党の福本個人に対する責任転嫁への憤りが伏在していたが、その際、福本が三月一一日に提出した上申書の「將來ノ方針ニ就イテ」の中に、獄中で取り組んでいた「近世日本學藝復興期ノ綜合比較研究」が実地調査を要するという個所で「柳田國男先生ニ見テイタダキマシテ、御教示ヲ仰グベク、スデニ其ノ御快諾ヲ得テ」[22]いるという記述がある。この一見唐突な柳田の「快諾」の事実も、両者の間に橋浦泰雄という人物を配置すれば自ずから理解できる。それは出獄後間もない四二年五月一二日付の福本が橋浦にあてた書簡によって明らかとなる。

拝啓　先般ハ御配慮ヲ辱ウシ深謝致シマス、御蔭デ多年念願ノ先生ニオ目ニカヽルヲ得、感激致シマシタ（中略）先生ノ御話ニヨリマスレバ、アナタハ浦富ノ御出身ニテ、西尾將軍ト御親戚デアラレマス由、当方舎弟ノ妻ガ鳥取高女出身デモト三田姓、ソノ三田ノオ父サンガヤハリ將軍トイトコニテ御親類ノ由、不思議ノツナガリニ驚イタコトデアリマシタ、伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考ト題スル百頁足ラズノ拙イ一文ヲ清書シマシタシ、裁判所ニ提出致シテヰマシタ近世日本学藝復興年表百数十枚ノモノモ返ヘシテ頂イテスッカリ整理致シマシタノデ、近ク又先生ニオ目ニカカリ御一閲ヲ煩ハシ度イト存ジテ居ル次第デアリマス（以下略、橋浦赤志氏所蔵）

「多年念願ノ先生」とは無論、柳田国男、「將軍」とは陸軍大将・西尾寿造、そして「当方舎弟」とあるのは、当時、

福本が身を寄せていた実弟福本正人のことである。奇しくも「不思議ノツナガリ」によって、福本の遠縁であることが判明した橋浦泰雄は、一〇代後半で郷里の鳥取にて『平民新聞』を読むことを端緒に社会主義に接し、二〇代の時、クロポトキンの『相互扶助論』に啓発され、一九二五年原始共産制の残存する僻村を求めて柳田を訪れた人物であり、心情的にはむしろ無政府主義の系統に属していた。そして弟の橋浦時雄が山川均を行動を共にし、福本を理論的指導者として再建された共産党には加わらなかったのと同様、自身もまた福本主義時代の共産党に対して距離をとり続け、ナップ（全日本無産者芸術聯盟）などの外郭団体に参画した以外は戦前党籍を持つには到らなかった。[23] 橋浦と福本の邂逅は弾圧が最も苛烈を極めた時期、研究素材としての民俗を通して初めて可能たり得たのである。

ともかくも柳田との面会を果たした福本は五月一九日、一七年振りに故郷の鳥取県下北条へ帰着する。六月一六日付で柳田に宛てた手紙には、疲労のため「先生からいただきました取調べもまだ一向に進」まないものの、「漸く方言録の追補だけをまとめました[24]」と近況報告をしている。「追補」の正編にあたるのは前掲の橋浦に宛てた書簡にある「伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考」のことであり、福本は帰郷前にこれを柳田に手渡し添削を乞うていた。方言研究に福本が着手した理由は、表向きは「一面国語ノ有難サ」を理解する補足としてであったが、この方言採集に対して福本がいかに熱心であったかは、郷里から順次柳田に送った採集手帖が示しており、出獄の際の方便でなかったことが看取される。[25]

福本が柳田に当てた方言録は正編と追補（一）から（十）によって成り、余白には全て柳田のコメントが記されている。このうち正編のみは出獄して日の浅い福本が帰郷を前にして「古イ記憶ヲ辿リナガラ思ヒ出ズママニ修史ノ余暇ヲ以テ何ノ秩序モナク書キツラネタモノ」（「伯耆北条地方ノ訛言、方言、略語考追補其ノ一」所収「ハシガキ」、鳥取県立博物館所蔵）であったが、柳田は福本が言葉の意味を未詳としたり空白にした部分に近接地の同種の方言を紹介したり的確な用例を記入した栞をはさんで返却している。鳥取へ帰ってからの実地調査を踏まえた福本がその採集手帖の「ハシガキ」に「語源ノ闡明ハ広汎ナル比較研究ニ基ヅクモノデナケレバ、独断論ニ終ルヲ免レ難クシテ……」（同前）と記したのも、経験を蓄積させ

ていく民俗研究法の一端に触れたことを考慮する必要がある。

福本が柳田の門を叩くことによって、福本主義全盛期の社会運動の一翼を担った「学生インテリゲンチャ小委員会」に出席が確実視されている六人のうち四人までが敗戦前に柳田に接触したことになる。[26] そしてこの時期、柳田は昔の福本主義者の多くが声高にアジア主義を唱えるのを直視する一方で、曾て圧倒的な観念的体系によって彼らを魅了した当の福本が、郷里に帰って集めた主観の混入しない「訛言、方言、略語考」に目を通すという立場に押し出されることになる。

一九四三年九月、橋浦を加えて浅野晃と行った鼎談の中で浅野が視察してきた東南アジア島嶼部の慣習を引き合いに出し、柳田の「民間伝承の学というもののあらましを、今日いろいろな方面で常識にまでしておくことが必要」なのではないかという問い掛けをしたところ、柳田は即座に「私らの同胞にたいして抱いている熱意というものを、すぐに転用してちがった人種に持って行くということは困難なんです。われわれはまだ彼らの霊魂には触れていないからね」[27] と安直に自身の民俗学を異民族に適用させることへの懸念をはっきり示す。当時の柳田に二〇年代後半、浅野を始めとする福本と直接交渉のあった学生活動家についての明確な認識があったかは即断できないが、柳田の発言はこれに先駆けて福本に対する民俗採集上の交流と指導を経ていることを確認する必要がある。

① 柳田国男「青年と学問」（『定本』第二五巻　一九六四年）一〇三頁、二五九頁。大正一四年五月、長野県東筑摩郡教育会での講演を基礎としたもの。

② 柳田国男「比較民俗学の問題」（『定本』第三〇巻　一九六九年）七二頁。一九四〇年一〇月『朝鮮民俗』第三号に掲載予定だった草稿。

③ 藤井隆至「柳田国男のアジア意識」（『アジア経済』一九七五年三月号）はこの文言を重視し、時流に対し柳田もまた迎合的な態度をとったことを示唆している。これに対して鳥越皓之「柳田国男の比較民俗学の論理構造」（竹田旦編『民俗学の進展と課題』国書刊行会　一九八九年所収）は一定の「心意」を共有する郷土人という国家の枠組とは異なる、極めて伸縮性のある概念を尺度に柳田が比較民俗学を想定した点を強調し、藤井論文を批判している。

④ 柳田国男「學問と民族結合」（『定本』第三〇巻　一九六四年）七四―五頁。初出は『朝鮮民俗』第三号（一九四〇年一〇月）。

⑤ 編集顧問は他に今井登志喜、石田幹之助、波多野乾一、大西斎、和田清、橋樸、長岡克麿、宮沢俊義、森口繁治。編集委員は水野の他に尾崎秀實、小沢正元、田中香苗、木村重、木下半治。

⑥ 石堂　前掲『わが異端の昭和史』二〇二頁。

⑦ 両者は『国際評論』編集長・小沢正元（二五年東大独法卒、新人会会員）の推輓で知り合って以来、尾崎は私的に石堂の編集業務を助けていた（石堂清倫『続わが異端の昭和史』〔勁草書房　一九九〇年〕二八二頁）。

⑧ 一九九二年一一月一六日付、石堂清倫氏より筆者宛書簡。同書簡によれば、コミンテルン系の情報活動には現役共産党員を入れてはならぬという鉄則がゾルゲを通して、この時尾崎の示した人選の慎重さとなってあらわれ、水野らとの接近も「尾崎がゾルゲと相談のうえ、解党派が反共反革命と日本司法当局から認定されていることが有力な原因」だった。

⑨ 浅野　前掲「文学的回想」四二三―四頁。

⑩ 後藤監修　前掲『柳田国男伝』八八九―九〇〇頁。

⑪ 一九九二年一一月一〇日、筆者による秋山孝夫氏からの聞き取り。秋山氏は一九三八年秋、当時の創元社東京支社に入社し、『アジア問題講座』編集の一端を知る数少ない一人である。氏によると水野は三八年当時、二三日おきに来社し、集まった原稿をチェックしていた。発行日の最も早い第一巻『政治・軍事篇（一）』、第二巻『政治・軍事篇（二）』（各々発行日は三九年三月二八日、同年一月一五日）は言わば要の巻であり、第一巻の「巻頭言」を柳田が書いたことの意味は大きかったと言わねばなるまい。

⑫ 浅野　前掲「戦前の思い出から」。石堂清倫氏から前掲書簡を通して大間知、喜入を編集・執筆陣に加える構想も「支那問題」講座の企画では入っておらず、従ってこれも水野、浅野の計らいによるものであると御教示頂いた。

⑬ 浅野晃「現代アジア思潮」（『アジア問題講座　思想・文化篇（二）』第一一巻　創元社　一九三九年）四三―四頁。

⑭ 大間知篤三「支那の婚姻」（『著作集』第六巻　一九八二年）二四四頁。ここで大間知は同一集団内での結婚を慣例にするのが内婚制、それを禁じ異集団の成員との結婚を原則とする場合を外婚制と定義している。

⑮ 湯治万蔵編『建国大学年表』（建国大学同窓会　一九八一年）六七頁。

⑯ 一九三九年二月二八日付、守随一、石堂清倫から柳田国男宛葉書（成城大学民俗学研究所所蔵）。柳田は満鉄の株を相当数持っており、戦後反古になったことを述懐している（前掲　牧田茂氏からの聞き取り）。

⑰ 湯治万蔵編　前掲　一六四頁。建国大学研究院は一九三八年九月一日に建国大学研究院令で定められた文科系諸科学の総合研究機関であり、三九年二月八日に当面の研究課題として「（一）建国原理ノ研究、（二）共産主義批判ノ研究、（三）民族ノ研究、（四）国民構成ノ研究、（五）満洲国ニ於ケル経済ノ実態並ニ実相ノ研究、（六）公社事業ノ研究、（七）支那ヲ中心トスル国際政治ノ研究」が設定されている（同書一二〇頁、一六二頁）。

⑱ 大間知篤三「オボ調査項目」（『著作集』第六巻）二三八―四二頁。初出は『満洲民族学会会報』一九四四年一月号。例えば「七、そのオボは如何なる団体に属するものか。そのオボ祭りは如何なる範囲の人々によって挙行されているか」、「二七、家庭にあってオボの神々に祈願するのは、如何なる必要から、如何なる機会に、また如何なる方式をもってなされるのか」。

⑲ 大間知篤三「民族研究所の必要」（『著作集』第六巻）五二頁。初出は『満洲日々新聞』一九四二年八月。

⑳ 「福本和夫に對する豫妨拘禁請求事件記録」（『昭和思想統制史資料』第三巻「共産主義・無政府主義篇3」生活社　一九八〇年）三四五頁。以下、「福本記録」と略す。

㉑ 石堂　前掲『中野重治と社会主義』一四一頁。
㉒ 前掲「福本記録」三七六頁。
㉓ 橋浦の足跡については拙稿「柳田国男と橋浦泰雄」（『史林』七五巻六号　一九九二年一一月）を参照。
㉔ 一九四二年六月一六日付、福本和夫から柳田国男宛書簡（『福本和夫書簡抄』〔日本ルネッサンス研究所　一九七八年〕一七―八頁）。
㉕ 前掲「福本記録」三六三頁。
㉖ 六名中、柳田との交流が認められないのは門屋博、中野尚夫。これ以外に同委員会に参加の可能性のある是枝恭二、冬野猛夫は各々三四年、三〇年に獄死。
㉗ 「民間伝承について」（『文藝春秋』一九四三年九月号）二九―三〇頁。

むすび――戦後の師弟関係

一九四六年、辛苦の末、満州から引き揚げて来た大間知は、しばらく郷里富山の富山高校（旧制）でドイツ語の教鞭をとっていたが、四八年九月、柳田の要請によって上京し、前年三月に「木曜会」が発展解消し成立して間もない民俗学研究所の嘱託として民俗学の活動を再開する。次いで翌年四月、「民間伝承の会」が新たに「日本民俗学会」に再編されるに及んで同学会評議員を委嘱され、行政面にも参画する。一九四九年一〇月の『民間伝承』に発表した大間知の「隠居制の調査項目」は対象を限定しながらも、曾ての「全国山村生活調査」、「海村調査」では柳田によって傍らに追いやられていた「調査地域の戸数、隠居数、それらの人数」、「家々の系譜、宗門人別帳、村の古記録類」等の文書・統計資料に留意することを冒頭に掲げ、「村の戸数割は隠居へもかかるか」、「村で戸数を数える場合通例隠居所をも一戸に数えるか」といった具体的な事実の把握を志向する項目を交え、民俗語彙偏重に流れる傾向にあった柳田主導の民俗調査を踏襲したものでは最早なかった。五一年に刊行された『八丈島――その民俗と社会』（創元社）で、大間知は一九三九年の「海村調査」で残した採集手帖に加え、四九年六月新たに行った調査結果を踏まえ、自身が「隠居制の調査項目」で提唱した方法を実践している。ここで大間知は隠居の時期決定に注目し、それが足入による数年の結婚生活を経た後、嫁入りに到る同島の婚姻制と相互に関連していることを導き出す。そして二つの習俗の背後にある嫁方の家の事情が、やがて婿方の事情によ

って追い越されていく過程の中に隠居制の時期決定の要因を読み取る。[1] 各々の民俗事象を言葉の次元だけではなく、抽象化して捉え再構成する大間知の民俗学の方法がここにその全貌をあらわしている。

五三年春より大間知は結核のため療養に努めていたが、翌五四年以降、民俗学研究所・日本民俗学会との関係を断つ。表向きの理由は柳田が極度に結核に対して神経質だったこととされるが、[2] 事実上柳田との交渉はこの時から行われなくなる。大間知が去っていった民俗学研究所は翌五五年暮れ、石田英一郎が五四年に講演「日本民俗学の将来」で行った発言を契機とする、柳田国男の解散宣言に直面する。日本民俗学を広義の人類学の一部として捉えるこの石田の主張は、四九年、柳田の民俗学に「最初から経國濟民といつた古い言葉で現せるような、現代及び未來への役に立つ學問という首尾一貫」したものと、人間自らの世界観拡大のために「人間自身の古い姿へ向つて、遠く深く遡つていく」歴史的な性格が備わっており、そこに民族学との接点を探ろうとする問い掛け[3]の中で既になされていたが、柳田はこの石田の提案を容れることなく、五七年四月民俗学研究所の解散を迎えることとなる。石田の主張は柳田民俗学が持っていた規範性を問い直すものであったが、これだけの果敢な提案が可能だったのは、石田が当初から直接柳田の傘下には属さず、周縁部から柳田の民俗学に接していたことと無関係ではない。その一方で石田と同様、二〇年代後半に福本主義に身を投じた大間知は、柳田の民俗学を抽象的、構造的なものにしようという、あくまで技術的な批判をもって柳田の民俗学から離れて行く。

一九六〇年代以降、多くは柳田民俗学批判として顕在化してくる社会学的手法による地域の集約的調査の提唱を背景として、大間知は「民俗調査の回顧」を発表し、柳田の指導下で従事した「山村調査」、「海村調査」を批判する。この調査方法批判は、滞在日数の短さ、古文書・統計資料の軽視、古老による口伝の偏重、民俗語彙の偏重、総体としての村落を捉える姿勢の欠如等の骨子からなり、かつて経験した採集調査は「村の特徴というものが全く考慮されず」、「村の個々の事象を捕らえようとしてきたにすぎない」ものと断ぜられる。そして往時、大間知がその作成に意を注ぎ、他の調査員の追随を許さぬまでの完成度を持っていた採集手帖についても、「むしろそれらは百のばらばらの項目であった。かりにあ

あした項目を二倍にも三倍にもふやしてみたところで、結果はやはり同じであったろう」[4]と、柳田によって設定された質問事項を一蹴する。戦前柳田に最も傾倒した民俗学者の一人の手によるこの批判は、戦後に到るまで厳然と残った柳田の研究組織が持つ硬直性の傍証ともなる。この視座に沿って限定的な空間から独自に隠居制、婚姻制の構造を抽出した点に於いて明らかに「大間知民俗学」の範疇は定まり得る。そこでは柳田に師事して以降身につけた民俗採集の技術だけではない、厳密な理論体系の許に大衆運動を抽象化して捉え、そこに一定の構造、法則性を見いだそうとする思潮に大間知が学生時代、身を置いたこととの連関性を無視する訳にはいかない。かつて「民間伝承の会」設立の契機となった日本民俗学講習会に於いて佐々木彦一郎が集落の形態を自然条件、農業経済、社会組織との相関関係から考察する視点を提起したことを省みれば、[5]大間知の行程はその延長にあると言ってもよい。しかしその一方、大間知による学術的洗練の過程で多くが捨象された「民衆の生活改善」こそ柳田が自己の民俗学に託した課題であり、轗軻のマルクス主義者が柳田の傘下に入った最たる要因だったことを忘れてはならない。

一九六七年一〇月、中野重治は講演「国語と方言」の中で、標準語による画一化に対して、方言擁護の立場から「その言葉でなければ現せないあるムードをもっている、そのムードというものは科学的に説明できるものだ」と持論を述べる。[6]客観的な立場から制度慣習を説き起こすのではなく、生活する人間の心に即して生活習俗を可変的に捉える柳田の民俗観は、ここで中野によって更に敷衍され、一般法則に対峙する眼前の事象という形で据えられている。この中野の姿勢には、新人会時代に意識の外にあった郷土の生活習俗に潜んだ普遍を拒む力を柳田民俗学受容とともに、その後のマルクス主義運動の中でもう一度捉え直した縮図がある。遡って一九四七年四月、柳田が第一回参議院選挙（全国区）に於いて、共産党から立候補した中野重治を支持した背景[7]には主義を異にしながらも、自身の学問の基底にある志と重なるものを中野のうちに見ていたことを示す。同時にそれは大戦下に生まれた柳田民俗学を学ぶ新人会会員という関係の中で、「師」たる柳田が自ら進んで見せた政治の場に於ける数少ない肯定的な意志表示でもあった。

① 『八丈島――その民俗と社会』（創元社　一九五二年）一七七―八頁。
② 鎌田久子「心ない別れ」（『著作集』第五巻月報　未来社　一九七五年）。
③ 「民俗学から民族学へ」（『民族学研究』一九五〇年二月号）一八五頁。柳田、折口信夫との鼎談。
④ 大間知篤三「民俗調査の回顧」（『日本民俗学大系』第一三巻　平凡社　一九六〇年）七―一二頁。
⑤ 佐々木彦一郎「民俗学と地理学との境」（柳田国男編『日本民俗学研究』岩波書店　一九三五年）三一三―四頁。三五年八月四日に行われた佐々木による同じ題名の講演録。
⑥ 中野重治『国語と方言』（カセットで聞く学芸語彙――岩波文化講演から――）（岩波書店／ＮＨＫサービスセンター）。一九六七年一〇月二日、札幌道新ホールでの講演。
⑦ 柳田国男「私は共産党に投票する」（『アカハタ』一九四七年四月二三日）。

（本稿は一九九三年度「文部省科学研究費補助金」による研究成果の一部である。）

（京都大学大学院生　　）

characteristics the Middle Yayoi Period in the Isewan region is divided into five stages.

From a collection and examination of pottery from throughout the Kinki and Isewan regions and from east of the Isewan region, it is seen that whilst in the Early Yayoi Period imported pottery is found throughout the whole region, in later periods its distribution is restricted to areas closest to Isewan, no imported pottery being found outside of Isewan by the Middle Period-4.

Changes in Yayoi pottery in the Kinki region are conventionally understood to be linked to developments in design technique made possible by effective use of the potter's wheel. From this investigation it can be seen that in the Isewan region such changes were not related to the use of the potter's wheel but were the result of attempts to achieve the most efficient design techniques possible without use of the wheel. The Middle Period-4 in Isewan, which corresponds to the Later Period 3-4 in Kinki, can be seen as a period when the directions of change in pottery design in the two regions were opposed and movement of pottery between the regions was coming to an end. In other words, changes in pottery in the Isewan region are clearly reflected in its interaction with the Kinki region, and furthermore, from a comparison with the surrounding areas, are seen to correspond closely with changing social trends throughout East and West Japan at that time.

The Folklore Studies of Yanagita Kunio and Todai Shinjinkai: With special reference to Omachi Tokuzo

by

TSURUMI Taro

In the 1930's Yanagita Kunio 柳田國男 developed his own style of folk research and in 1935 established the Folk Society 民間伝承の会, which many leftists joined as a result of the thought control activities of the government. Some of these, who had been members of Todai Shinjinkai 東京帝大新人会, and who had been leaders in the students' social movement of the 1920's devoted themselves to Yanagita's folklore studies. It

has been thought that they sought to develop their insight into the people and their native culture by studying Yanagita's work after their conversion from communism. However, at the level of their patterns of thought, there remained a remarkable inconsistency between Yanagita's inductive method, collecting pieces of folk vocabulary by fieldwork, and the ideas of most of the former Shinjinkai members, who had been fascinated by 'Fukumoto-ism' 福本主義 and expected the people to be directed by the elite. These latent differences became more apparent as they participated ideologically in Japanese aggression against other Asian countries and sought to persuade Yanagita to develop a systematic theory applicable to the whole of Asia.

This strained relationship is particularly noticeable in the case of folklorist Omachi Tokuzo 大間知篤三, who had been the leader of Shinjinkai in the late 1920's. While Omachi was one of the most skilled in Yanagita's method, he was a member of the National Thought Research Institute 国民思想研究所, a facility for the protection of converts, at which he was engaged in research into the customs of Japanese families. Furthermore, in 1939 he accepted a post at the National University of Manchuria 満州建国大学, conducting investigations into minority groups in Manchuria until the end of the war. Under these circumstances, Omachi established his own methodology, by which the researcher can interpret folk phenomena structurally through intensive fieldwork. Thus, Yanagita's tolerance for leftists, and his 'teacher-pupil' relationship with former Shinjinkai members, hid a variety of complications.